

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森 博 (シン ハク)

森博氏の博士論文「医療コミュニケーションにおけるメタファーの役割——認知の共同構築の観点から」の審査結果について以下に報告する。本論文は、医療コミュニケーションという現代社会の重要課題に認知言語学の方法論をもって取り組んだ研究である。論文は全6章からなる。

第1章「イントロダクション」では、問題提起とデータについて概説している。医療において、言葉によるコミュニケーションは医療者と患者が信頼関係を築き、治療をスムーズに進める基礎である。メタファーはそれを用いる話し手および所属する集団の認知様式を表出しており、医療者・患者間の会話におけるメタファーは、認知の共同構築の手段だと考えられる。

第2章「先行研究と本稿の位置づけ」では、先行研究をまとめ、本研究の位置づけを、医療コミュニケーション研究と認知意味論の観点から述べている。特に、メンタル・スペースのブレンディング理論を採用しつつ、メタファーの成立条件とメタファーの部分的写像を解明する解釈モデルを提示している。

第3章「医療者メタファーと患者メタファーのギャップ」では、同じ事柄について、医療者と患者が用いるメタファー表現の相違に反映される認知のずれを考察している。具体的には、3.1節においては患者が体内の「痛み」という感覚を「外傷」に例える行為と、医療者が持っている〈人体は機械〉という比喩的思考の枠組みとの関係を検討している。3.2節においては〈治療は戦い〉の医療者メタファーと患者の病気観の間に存在するギャップを検討している。3.3節では、特定のメタファーを運用する際に、具体的な場面を考慮し、類似性と非類似性を十分確認することの重要性が指摘されている。

第4章「医療場面におけるメタファーの役割」では、医療の現場において交わされる多様なメタファーを含む8つの会話データを取り上げ、認知の共有化を築き上げるプロセスを観察している。コミュニケーションの参加者がそれぞれ認知主体として異なる背景知識および事態把握をもつ中で、メタファーはある把握の仕方をハイライトし、それを意識化することで、認識の共有をはかるきっかけとしている。4.1節においては、医療者は患者がよく知っている分野を根源領域とするメタファーを使用し、患者の理解を得るプロセスを分析・報告している。4.2節においては、患者が治療方法について決断できなかったり、治療目的とは関係の低い話題をしているときに、医療者はメタファーを用いて事態を捉え直し、患者に新たな見方を提供する現象を取り上げている。4.3節においては、擬人化のメタファーがラポール構築に役立つケースを分析している。4.4節では、医療現場における会話内でのメタファー使用一般について考察し、日本語と中国語の相違点について示している。

第5章「メタファーと医療情報リテラシー」では、メタファー使用によるプライミング効果をアンケート調査によって示している。メディアを通じて広まった医療情報の中に含まれるメタファー表現が、プライミング効果を起こして人々の認識および行動に影響をもたらしていることを実証している。それは認知メタファー理論の予測する、概念フレームに基づいた推論の表れでもある。

第6章「総括」は結論として包括的な考察を行っている。

本論文の学術的意義は、以下の二点に集約される。

第一に、医療コミュニケーション研究はその重要性にもかかわらず、言語学研究者の貢献がきわめて限られている。メタファーと認知についての研究は臨床心理での研究が多く、より具体的な身体の状態についての医療談話は対象とされていなかった。また、身体の状態についての談話の研究も、これまでは会話分析（非言語行動も含めた、観察可能な側面の微視的研究）の方法によるものが主であり、会話の参与者によるメタファー使用を通じた事態の概念化とそのすり合わせプロセスについての質的研究として、本研究はパイオニア的な意義をもつ。

第二に、認知的メタファー研究にとって、これまでの研究は作例による単文での用法を分析した研究が主であり、談話内でのメタファーのはたらきについての認知言語学的研究は、比較的最近のものである。実際の言語使用の場において、どのような局面で、誰によってメタファーが使用され、それが談話の参与者にとってどのような影響を与えるかの具体的な分析—著者の言葉によれば「生の」談話におけるメタファー使用—は、今後の認知的メタファー研究の発展のための貴重な礎石となる。

以上二点はいずれも、本研究のオリジナルな貢献であり、高く評価される。

審査においては、活発な質疑応答が行われた。以下に特に重要な点を挙げる。(a) 医療者、患者のどちらがより頻繁にメタファーを使うかについて、特に前者が積極的にメタファーを導入する局面が見られた。これは医療現場における背景知識の相違から説明可能である。一方、日本語と中国語における医療コミュニケーションの比較では、後者の方でメタファーが比較的出やすいという観察はどのように説明すべきかという点については、検討の余地が残った。(b) 痛みの表現においては、誰も経験したことがないようなことをソースとして比喩が成立することがあるが、そこでの基盤は何かという問いかけに対しては、部分的な経験の共通性による理解が可能であるという議論がなされた。これと関連して、(c) カテゴリー拡張において抽象化が必ず起きるという主張に対しては、それはメタファーに限定した現象であり、また上位カテゴリーの形成は拡張の後に意識化されるのではないかという指摘があった。(d) ある程度具体的な概念間の対応づけによるメタファーと、空間と時間のメタファーとは、使用者の意識化の度合いが異なり、それとともに医療現場での機能も違うのではないかという議論がされた。

以上、本論文は認知言語学の知見を取り入れ、医療コミュニケーション研究に新しいページを開くものである。審査においては上記の指摘がなされたものの、それらは本研究の学術的意義をそこねるものではない。認知的メタファー理論の応用可能性を多くの貴重な知見とともに示した本研究は、学術的価値がきわめて高く、この分野における優れた研究成果であると判定する。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。